

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530835

研究課題名(和文)対人言語コミュニケーション能力養成プログラムの構築、実施、および分析・評価

研究課題名(英文)Development of a program for the verbal communication competence

研究代表者

小山 哲春(KOYAMA, Tetsuharu)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：60367977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：<1>言語コミュニケーションスキル向上システムの構築と実施：様々な対人コミュニケーション場面における言語コミュニケーション行動について、理論的な説明、自らのコミュニケーション行動の評価、およびスキル向上のための実践をセットとした講義・演習を構築し、本研究代表者の担当するコミュニケーション関連科目において実施した。

<2>測定と分析：プログラムの開始時と終了時の二回に分けて受講者の「言語コミュニケーション能力」を測定した。結果として、受講者のコミュニケーションに対する捉え方(定義)、認知的複雑性、および一部の言語コミュニケーション能力(統制や慰め等)において統計的に有意な向上が見られた。

研究成果の概要(英文)：<1>Development of the Communication Competence Training Program: The principal researcher developed a communication program that involves three major components: theory learning, self-evaluation, and practices, and administer the program to a group of students enrolled in communication courses at a college level (taught by the principle researcher himself). <2>Measurement of Communication Competence: Communication Competence and other related variables were measured both prior to and after the program. The results showed a significant improvement in <a> their theoretical understanding of the concept "communication," their cognitive complexity, and <c> abilities to design effective messages in several communication situations (e.g., comforting, regulating, etc.).

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：言語コミュニケーション コミュニケーション能力 認知的複雑性 理論的理解 コミュニケーション教育

1. 研究開始当初の背景

現代社会において「コミュニケーション(能力)」の重要性が指摘され始めて久しいが、対人コミュニケーション能力の定義、測定、ならびに理論・実践の教授法は、今日でも研究課題としての価値や必要性を失っておらず、むしろ今後も多くの研究成果を必要としている。例えば、多くのメディアで現代人のコミュニケーション能力不足が言及されているが、実証的に「能力不足」を検証した研究はさほど多くなく、そもそも「コミュニケーション能力」の在り方を明確に理論化した上で人のコミュニケーション行動を検証した試みもほとんど見られない。また、経験や直感に基づく行動療法的なスキルの教授が大学、企業、その他一般向けの講座などでしばしば行われているが、その効果を実証的に検討したり、社会科学的研究成果を基盤にした講座やトレーニング・プログラム構築を試みたケースは、過去 10~15 年の間に徐々に増えているものの(大坊 2003, 2005)未だ必ずしも十分とはいえない。つまり、学術的にも実践的にも、日本におけるコミュニケーション能力研究(およびトレーニング・プログラムの構築)は今後さらに基礎/応用研究を必要とする段階にあると言える。

2. 研究の目的

本研究は、現代社会の要請に応えることができ、同時に学術的貢献も果たせるような、社会科学的根拠に裏打ちされたコミュニケーション能力養成プログラムの構築と評価を目標とした。具体的には、以下の2つの研究課題が立てられた:

<第一課題(基礎研究)> 対人コミュニケーション場面での効果的な言語メッセージ産出(メッセージ・デザイン)の認知的メカニズム解明

<第二課題(応用研究)> 対人言語コミュニケーション・スキル(メッセージ・デザイン能力)向上のメカニズム解明: トレーニング・プログラムの構築と評価

3. 研究の方法

理論的基盤となる第一研究課題(言語コミュニケーション能力に関する基礎研究: 海外視察を含む)を1・2年目に行い、2年目からはこれらの成果を踏まえながらトレーニングプログラム構築(第二課題)した。特に、対人言語コミュニケーション能力とはいかなるものか、コミュニケーション学での過去の基礎研究での概念化(conceptualization)と操作化(operationalization)を再吟味した。

3・4年目には、研究代表者の所属する大学機関において構築したプログラムを本格実施した。第一課題の成果を土台とし、主に大学生を対象とした対人言語コミュニケーションスキル・トレーニングプログラムを構築した。理論教授(理解)、自己行動認識(気

づき)、実習(行動訓練)、およびデータベースを利用したオンライン演習を組み合わせた。

さらに、最終年度にプログラム評価(コミュニケーション能力評価)を行った。第一課題で構築した言語コミュニケーションスキルの計測(measurement)を通時的に行い、参加者のスキル向上度合いを観察し、その要因を詳細に分析した。

4. 研究成果

(1) コミュニケーションプログラムの構築

先行研究・事例の多い米国のコミュニケーショントレーニングプログラムに関して調査し、本研究の基盤とした。アメリカカリフォルニア州内にある4つの大学(1州立大学、および3のCommunity College)のコミュニケーション学科において聞き取り調査を実施し、プログラムの構成とその成果について実地調査を行った結果、必ずしも統一的な見解やプログラムが存在するわけではなく、むしろ各プログラムの担当者の教育哲学、研究背景が色濃く反映されたカリキュラムが実施されていることが分かった。

これらの調査結果、および文献研究の結果として、本プロジェクトでは、対人コミュニケーション能力の基盤に認知的複雑性(cognitive complexity)や他者視点の取り込み(perspective taking)能力があり(Burleson & Caplan, 1998 その他参照)、また自分や他人のコミュニケーションスタイル(MDL)に関する理解(O'Keefe & Lambert, 1995)などが深く関わると仮定し、また小山(2009 他)で観察された日本人特有のスタイルなどを考慮した上で、こうした概念を理論的に教授し、また受講者がこの理解を元に自身のコンピテンスを評価する演習を組み込んだプログラムを構築した。特に演習としては、様々な対人コミュニケーション場面における言語コミュニケーション行動(説得、慰め、規制、議論、欺瞞、等)に関して実際にメッセージを産出し、これを評価する演習とした。

(2) コミュニケーション評価システムの構築

プログラム受講者のコミュニケーション能力の測定システムとして、オンラインでの調査票を作成した(SurveyMonkeyを使用)。受講者の対人コミュニケーション能力(効果的なメッセージ産出能力)・認知的複雑性・コミュニケーション・スタイルを測定し、三変数間の相関(共分散)分析を行うため、各変数の測定には、先行研究で幅広く利用されている Elicitation Task 法を用いた。周到にデザインされた具体的な状況が文章で提示され、被験者はこれを読んでその状況で自らが実際に言う・行うであろうことを想起し、詳細に記述するよう求めるものとした。

【引用文献】

- 相川充. (2001). 『人付き合いの技術 - 社会的スキルの心理学 -』. サイエンス社.
- 大坊郁夫. (2003). 『社会的スキル・トレーニング方法序説：適応的な対人関係の構築』. 『対人社会心理学研究』3 (pp.1-8).
- 大坊郁夫 (編). (2005). 『社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション』. ナカニシヤ書店.
- 小山哲春. (2010). 『日本人の対人コミュニケーション能力とメッセージデザイン～構成主義コミュニケーション論からの考察～』. *Speech Communication Education*, 23, 85-110.
- 小山哲春. (2009). 『日本人の対人コミュニケーション能力とメッセージデザイン』. 日本コミュニケーション学会第39回年次大会発表資料集 (p.17).
- 小山哲春. (2005). 『対人コミュニケーション能力の形成要因に関する考察：認知複雑度とコミュニケーションスタイルとの関係』. 日本コミュニケーション学会第35回年次大会発表論文.
- Burleson, B., & Caplan, S. (1998). Cognitive Complexity. In McCroskey, et al. (Eds), *Communication and Personality*. Hampton Press.
- Canary, D. J., Cody, M. J., & Manusov, V. L. (2003). *Interpersonal communication: A goals-based approach* (3rd ed). Boston, MA: Bedford/St. Martin's.
- O'Keefe, B. J. (1988). "The logic of message design: Individual differences in reasoning about communication." *Communication Monographs*, 55, 80-103.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 4 件)

- 小山哲春. 「コミュニケーション教育における理論習得の役割：実践的スキルの礎としてのコミュニケーション理解」. 日本コミュニケーション学会第13回関西支部大会. 2015年3月21日. 京都ノートルダム女子大学(京都府京都市).
- 小山哲春. 「非協調的コミュニケーションとしての「言い逃れ」～記述的/実証的アプローチによる Covert Evasion の分析」. 日本コミュニケーション学会第11回関西支部大会. 2013年3月20日. 城北市民学習センター(大阪府大阪市).
- 小山哲春. 「協調コミュニケーションとジェスチャーの理解」. 日本コミュニケーション学会関西支部秋季研究会. 2012年10月10日. 大阪キリスト教短期大学(大阪府大阪市).
- 徳弘沙耶香、小山哲春. 「対人コンフリクト管理能力の構成要因－文化的自己観と認知能力が与える影響の考察－」. 日本コミュニケーション学会第41回年次大会. 2011年6月19日. 西南学院大学(福岡県福岡市).

〔図書〕(計 1 件)

山本雅子、甲田直美、小山哲春. 『認知日本語文法講座：認知語用論』. (分担執筆：第2章「社会認知語用論による発話理解モデル」). 東京：くろしお出版. 2016年3月刊行予定.

〔産業財産権〕

○願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

小山 哲春 (KOYAMA, Tetsuharu)
京都ノートルダム女子大学
人間文化学部・准教授
研究者番号：60367977

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

Jason Siegel (SIEGEL, Jason)
Claremont Graduate University (United States)